

与謝野晶子 訳

# 源氏物語

玉鬘卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

玉鬘

紫式部

與謝野晶子訳

火のくにおひいでたれば言ふことの  
皆恥づかしく頬ほの染まるかな（晶子）

年月はどんなにたっても、源氏は死んだ夕顔のことを少しも忘れずにいた。個性の違った恋人を幾人も得た人生の行路に、その人がいたならばと遺憾に思われることが多かった。右近は何でもない平凡な女であるが、源氏は夕顔の形見と違って庇護するところがあったから、今日では古い女房の一人になって重んぜられもしていた。須磨すまへ源氏の行く時に夫人のほうへ女房を皆移してしまつたから、今では紫夫人の侍女になつてゐるのである。善良なおとなしい女房と夫人も認めて愛していたが、右近の心の中では、夕顔夫人が生きていたなら、明石夫人が愛されてゐるほどには源氏から思われておいで

になるであろう、たいした恋でもなかった女性たちさえ、余さず将来の保証をつけてお  
いでになるような情け深い源氏であるから、紫夫人などの列にははいらないでも、六条  
院へのわたましの夫人の中にはおいでになるはずであるといつも悲しんでいた。西の京  
へ別居させてあった姫君がどうなったかも右近は知らずにいた。夕顔の死が告げてやり  
にくい心弱さと、今になって相手の自分であったことは知らせないようにと源氏から言  
われたことでの遠慮とが、右近のほうから尋ね出すことをさせなかった。そのうちに、  
乳母めのとの良人おつとが九州の少貳しょうじに任ぜられたので、一家は九州へ下った。姫君の四つになる年  
のことである。乳母たちは母君の行くえを知ろうといろいろの神仏に願を立て、夜昼泣  
いて恋しがっていたが何のかいもなかった。しかたがない、姫君だけでも夫人の形見に  
育てていたい、卑しい自分らといっしょに遠国へおつれすることを悲しんでいると父君  
のほうへほのめかした我也想ったが、よいつてはなかった。その上母君の所在を自分  
らが知らずにいては、問われた場合に返辞へんじのしようもない。よく馴染なじんでおいでになら  
ない姫君を、父君へ渡して立つて行くのも、自分らの気がかり千万なことであらうし、  
話をお聞きになった以上は、いっしょにつれて行ってもよいと父君が許されるはずがな  
いなどと言ひ出す者もあって、美しくて、すでにもう高貴な相の備わっている姫君を、

普通の旅役人の船に乗せて立つて行く時、その人々は非常に悲しかった。幼い姫君も母君を忘れずに、

「お母様の所へ行くの」

と時々尋ねることが人々の心をより切なくした。涙の絶え間もないほど夕顔夫人を恋しがつて娘たちの泣くのを、

「船の旅は縁起を祝って行かなければならないのだから」

とも親たちは小言こごとを言った。美しい名所名所を見物する時、

「若々しいお気持ちの方で、お喜びになるでしょうから、こんな景色けしきをお目にかけてい。けれども奥様がおいになつたら私たちは旅に出てないわけですね」

こんなことを言つて、京ばかりの思われるこの人たちの目には帰って行く波もうらやましかった。心細くなっている時に、船夫かこたちは荒々しい声で「悲しいものだ、遠くへ来てしまった」という意味の唄うたを唄う声が聞こえてきて、姉妹きょうだいは向かい合つて泣いた。

船人もたれを恋ふるや大島のうら悲しくも声の聞こゆる

来し方こも行方ゆくへも知らぬ沖に出いでてあはれ何処いづこに君を恋ふらん

海の景色を見てはこんな歌も作っていた。金の岬かねみさきを過ぎても「千早ちはや振る金の御崎みさきを過ぐれどもわれは忘れずしがのすめ神」という歌のように夕顔夫人を忘れることができずに娘たちは恋しがった。少弐一家は姫君をかしき立てることだけを幸福に思つて任地で暮らしていた。夢などにたまさか夕顔の君を見ることもあつた。同じような女が横に立っているような夢で、その夢を見たあとではいつもその人が病氣のようになることから、もう死んでおしまいになつたのであらうと、悲しいが思うようになった。

少弐は任期が満ちた時に出京しようと思つたが、出京して失職しているより、地方にこのままいるほうが生活の樂な点があつて、思ひきつて上京することもようしなかつた。その間に当人は重い病氣になつた。少弐は死ぬまぎわにも、もう十歳とおぐらいになつていて、非常に美しい姫君を見て、

「私までもお見捨てすることになれば、どんなに御苦勞をなされることだろう、卑しい田舎いなかでお育ちになつてゐることももつたないことと思つておりましたが、そのうち京へお供して参つて、御肉身のかたがたへお知らせ申し、その先はあなた様の運命に任せるといたしましても、京は広い所ですから、よいこともきつとあつて、安心がさせていただけると思ひまして、その実行を早く早くとあせるように思つておりましたが、希望

の実現どころか、私はもうここで死ぬことになりました」

と悲痛なことを言っていた。三人の男の子に、

「おまえたちは何よりせねばならぬことを、姫君を京へお供することと思え。私のための仏事などはするに及ばん」

と遺言をした。父君のだれであるかは自身の家の者にも言わずに、ただ大切にすることのある孫であると言つてあつて、大事にかしずいているうちに、こんなふうでにわか死んだのであつたから、家族は心細がつて京への出立を急ぐのであるが、この国には故人の少々に反感を持つていた人が多かったから、そんな際に報復を受けることが恐ろしくて、今しばらく今しばらくとはばかりて暮らしている間にも、年月がどんどんたつてしまつた。妙齡になつた姫君の容貌ようぼうは母の夕顔よりも美しかった。父親のほうの筋によるのか、気高い美けだかがこの人には備わつていた、性質も貴女きじよらしくおおようであつた。故人の少々の家に美しい娘のいる噂うわさを聞いて、好色な地方人などが幾人いくたりも結婚を申し込んだり、手紙を送つて来たりする。失敬なことであるとも、とんでもないことであるとも思つて、だれ一人これに好意を持つてやる者はなかつた。

「容貌はまず無難でも、不具なところが身体からだにある孫ですから、結婚はさせずに尼にし

て自分の生きている間は手もとへ置く」

乳母めのとはこんなことを宣伝的に言っているのである。

「少弐の孫は片輪かたわだそうだ、惜しいものだ、かわいそうに」

と人が言うのを聞くと、乳母はまた済まない気がして、

「どんなにしても京へおつれしてお父様の殿様にお知らせしよう、まだごくお小さい時にも非常におかわいがりになっていたのだから、今になっても決してそまつにはあそばすまい」

と乳母は興奮する。その実現されるように神や仏に願を立てていた。娘たちも息子たちも土地の者と縁組みをして土着せねばならぬように傾いていく。心の中では忘れないが京はいよいよ遠い所になっていった。おとな大人になった姫君は、自身の運命を悲しんで一年の三度の長精進などもしていた。はたち二十ぐらいになるとすべての美が完成されて、まばゆいほどの人になった。この少弐しょうに一家のいる所は肥前の国なのである。その辺での豪族などは、少弐の孫の噂うわさを聞いて、今でも絶えず結婚を申し込んでくる、うるさいほどに。

大夫たゆうの監げんと言って肥後に聞こえた豪族があつた。その国ではずいぶん勢いのある男



で、強大な武力を持っているのである。そんな田舎武士いなかざむらいの心にも、好色的な風流氣があつて、美人を多く妻妾さいしやうとして集めたい望みを持っているのである。少貳家の姫君のこゝとを大夫の監は聞きつけて、

「どんな不具なところがあつても、自分はその点を我慢することにして妻にしたい」と懇切に求婚をしてきた。少貳の人たちは恐ろしく思つた。

「どんないい縁談にも彼女は耳をかさないで尼になろうとしています」

と中に立つた人から断わらせた。それを聞くと監は不安がつて、自身で肥前へ出て来た。少貳家の息子たちを監は旅宿へ呼んで姫君との縁組みに助力を求めたのであつた。

「成功すれば、両家は力になり合つて、あなたがたに武力の後援を惜しむものですか」などと言つてくれる監げんに二人の息子だけは好意を持ちだした。

「私たちも初めは不似合いな求婚者だ、お氣の毒だと姫君のことを思つてましたが、考えてみると、自分たちの後ろ立てにするのには最も都合のいい有力な男ですから、この人に敵対をされては肥前あたりで何をすることも不可能だということがわかつてきました。貴族の姫君だと言つても、父君が打っちゃつてお置きになるし、世間からも認められていないではしかたがありません。こんなに熱心になつている監と結婚のできるのは

かえって幸福だと思いますよ。この宿命のあるために九州などへ姫君がおいでになることにもなったのでしよう。逃げ隠れをなすつても何になるのですか。負けてなんかいませんからね、監は。常識で考えられる以上の無茶なことでも監はしますよ」

と兄弟は家族をおどすのである。長兄の豊後介<sup>ぶんごのすけ</sup>だけは監の味方でなかった。

「もつたいないことだ。少貳の御遺言があるのだから、自分はどうしてもこの際姫君を京へお供しましょう」

と母や妹に言う。女たちも皆泣いて心配していた。母君がどうおなりになったか知れないようなことになって、せめて姫君を人並みな幸福な方にしないではと、自分らは念じているのに、田舎武士<sup>いなかざむらい</sup>などに嫁<sup>と</sup>がせておしまいすることなどは堪えうることでないと思っていることも知らずに、自身の力を過信している監は、手紙を書いて送ってきたりするのである。字などもちよつときれいで、唐紙<sup>とうし</sup>に香の薫<sup>かお</sup>りの染<sup>し</sup>ませたのに書いて来る手紙も、文章も物になってはいなかった。また自身も親しくなった少貳家の次男とつれ立<sup>たず</sup>って訪ねて来た。年は三十くらいの男で、背が高くて、ものものしく肥っている。きたくは思われないが、いろいろな先入主になっていることがあつて、見た感じがうとましい。荒々しい様子は見ただけでも恐ろしい気がした。血色がよくて快活ではあるが、

洶れ声で語り散らす。求婚者は夜に訪問するものになっているが、これは風変わりな春の夕方のことであつた。秋ではないが怪しい気持ち（何時<sup>いつ</sup>とても恋しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり）になつたのかもしれない。機嫌<sup>きげん</sup>をそこねまいとして未亡人のおとどが出て応接した。

「お亡れになつた少弐は人情味のたつぷりとあるりつぱなお役人でしたからぜひ御懇親をお願いしたいと思ひながら、こちらの尊敬心をお見せできなかったうちにお気の毒に死んでおしまいになつたから、そのかわりに御遺族へ敬意を表しようと思つて、奮発して、一所懸命になつて、しいて参りました。こちらにおいでになる姫君が御身分のいいことを私は聞いていて、尊敬申しますが、妻になつていただきたいのだ。我輩<sup>わがはい</sup>は一家の御主人と思つて頭の上へ載せんばかりにしてですね、大事にいたしますよ。あなたがこの縁組みにあまり御賛成にならないというのは、私がこれまで幾人ものつまらない女と関係してきたことで、いやがられているのではありませんか。たとえそんな女どもが私についているとしても、そいつらに姫君といつしよの扱いなどをするものですか。我輩は姫君を後の位<sup>あとゐ</sup>から落とすつもりはない」

などと勝手なことを監<sup>げん</sup>は言い続けた。

「いえ、不賛成などと、そんなことはありません。非常に結構なお話だと私は思っているのですがね。何という不運なのでしょう、あの人は並み並みに一人前の女に成り切っていないところがありましてね、自分は結婚のできない身体からだだとあきらめています、かわいそうでも、私どもの力ではどうにもならないのでございます」

と、おとどは言った。

「決して遠慮をなさるには及びませんよ。どんな盲目めくらでも、いざりでも私は護まもっていますてあげます。我輩わがはいが人並みの身体に直してあげますよ。肥後一国の神仏は我輩の意志どおりにも何事も加勢けいせいしてくれますからね」

などと監げんは誇うっていた。結婚の日どりも何日いっごろというようなことを監が言くと、おとどのほうでは、今月は春の季の終わりで結婚によろしくないというような田舎めいた口実で断ことわる。縁側えんがわから下りて行く時になって、監は歌を作って見せなくなった。やや長く考えてから言い出す。

「君にもし心たがはば松浦まつらなるかがみの神をかけて誓はん

この和歌は我輩の偽らない感情がうまく表現できたと思います」

と監は笑顔を見せた。おとどはすべてのことが調子はずれな田舎武士に、返歌などを  
する気にはなれないのであったが、娘たちに歌を詠めと言うと、

「私など、お母さんだつてそうでしょう。自失している体よ」

こう言つて聞かない。おとどは興味のない返歌をやつと出まかせふうに言つた。

年を経て祈る心のたがひなばかがみの神をつらしとや見ん

先刻からの気味悪さにおとどは慄え声になつていた。

「お待ちなさい。そのお返事の内容だが」

監がのつそりと寄つて来て、腑に落ちぬという顔をするのを見て、おとどは真青に  
なつてしまった。娘たちはあんなに言つていたものの、こうなつては氣強く笑つて出  
行つた。

「それはね、お嬢様が世間並みの方でないことから、母がこの御縁の成立した時に、恨  
めしくお思ひにならないかということを、もうばけております母が神様のお名などを入

れて、変に詠んだだけの歌ですよ」

とこじつけて聞かせた。正解したところで求婚者へのお愛想歌なのであるが、

「ああもつとも、もつとも」

とうなずいて、監は、

「技巧が達者なものです。我輩は田舎者ではあるが賤民じゃないのです。京の人でもたいしたものでないことを我輩は知っている。輕蔑けいべつしてはいけませんよ」

と言ったが、もう一首歌を作ろうとして、できなかったのかそのまま帰って行つた。

次郎がすっかりあちらがたになっているのを家族は憎みながらも、豊後介の助けを求めることが急であつた。どうして姫君にお尽くしすればよいか、相談相手はなし、親身の兄弟までが監に反対すると言つて、異端者扱いにして自分と絶交する始末である。監の敵になつてはこの地方で何一つ仕事はできないだろう、手出しをしてかえつて自分から不幸を招きはしまいかと豊後介は煩悶はんもんをしたのであるが、姫君が口では何事も言わずにこのことで悲しんでいる様子を見ると、氣の毒で、そうなれば死のうと決心している様子が道理に思われ、豊後介は苦しい策をして姫君の上京を助けることにした。妹たちも馴染なじんだ良人おっとを捨てて姫君について行くことになった。あてきと言つて、夕顔夫人の

使つていた童女は兵部ひょうぶの君という女房になつていて、この女たちが付き添つて、夜に家を出て船に乗つた。大夫たゆうの監げんはいつたん肥後へ歸つて四月二十日ごろに吉日を選んで新婦を迎えに来ようとしてゐるうちに、こうして肥前を脱出するのである。姉は子供もおぜいになつていて同行ができないのである。行く人、残る人なごりが名残を惜しんで、また見る機会おきのないことを悲しむのであつたが、行く人にとつては長い年月をここで送つたのではあつても、見捨てがたいほど心の残るものは何もこの土地になかつた。ただ松浦の宮の前の海岸の風光と姉娘と別れることだけがだれにもつらかつた。顧みもされた。

浮島うきしまを漕こぎ離れても行く方やいづくともりと知らずもあるかな

行くさきも見えぬ波路に船出して風に任する身こそ浮きたれ

初めのは兵部の作で、あとののは姫君の歌である。心細くて姫君は船でうつ伏しになつてゐた。こうして逃げ出したことが肥後に知れたなら、負けぎらいな監は追つて来るであらうと思われるのが恐ろしくて、この船は早船といつて、普通以上の速力が出るように仕かけてある船であつたから、ちょうど追い風も得て危ういほどにも早く京をさして

走った。響の灘も無事に過ぎた。海上生活二、三日のちである。

「海賊の船なんだろうか、小さい船が飛ぶように走って来る」

などと言う者がある。惨酷な海賊よりも少弐の遺族は大夫の監をもっと恐れていて、その追っ手ではないかと胸を冷やした。

憂きことに胸のみ騒ぐひびきには響の灘も名のみなりけり

と姫君は口ずさんでいた。川尻が近づいたと聞いた時に船中の人ははじめてほつとした。例の船子は「唐泊より川尻押すほどは」と唄っていた。荒々しい彼らの声も身に沁んだ。豊後介はしみじみする声で、愛する妻子も忘れて来たと歌われているとき、その歌のとおりにも自分も皆捨てて来た、どうなるであろう、力になるような郎党は皆自分がつれて来てしまった。自分に対する憎悪の念から大夫の監は彼らに復讐をしないであろうか、その点を考えないで幼稚な考えで、脱出して来たと、こんなことが思われて、気の弱くなった豊後介は泣いた。「胡地妻子虚棄損」とこう兄の歌っている声を聞いて兵部も悲しんだ。自分のしていることは何事であろう、愛してくれる男ににわかにそむい



て出て来たことをどう思っているであろうと、こんなことが思われたのである。京へは  
いっても自分らは帰って行く邸やしやなどはない、知人の所といつても、たよって行つてよい  
ほど頼もしい家もない、ただ一人の姫君のために生活の根柢のできていた土地を離れ  
て、空想の世界へ踏み入ろうとする者であると豊後介は考えさせられた。姫君をもど  
するつもりでいるのであるうと自身であきれながらも今さらしかたがなくてそのまま一  
行は京へはいった。九条に昔知っていた人の残っていたのを捜し出して、九州の人たち  
は足どまりにした。ここは京の中ではあるがはかばかしい人の住んでいる所でもない町  
である。外で働く女や商人の多い町の中で、悲しい心を抱いて暮らしていたが、秋にな  
るといつそう物事が身に沁しんで思われて過去からも、未来からも暗い影ばかりが投げら  
れる気がした。信頼てづるされている豊後介も、京では水鳥が陸へ上がったようなもので、職  
を求める手蔓てづるも知らないものであった。今さら肥前へ帰るのも恥ずかしくてできないこと  
であった。思慮の足りなかったことを豊後介は後悔するばかりであるが、つれて来た郎  
党も何かの口実を作つて一人去り二人去り、九州へ逃げて帰る者ばかりであった。無力  
な失職者になつている長男に同情したようなことを母のおとどが言うと、

「私などのことは何でもありません。姫君を護まもつていることができれば、自分の郎党な

どは一人もなくなってもいいのですよ。どんなに自分らが強力な豪族になったつても、姫君をああした野蛮な連中に取りられてしまえば、精神的に死んでしまったのも同然ですよ」

と豊後介は慰めるのであった。

「神仏のお力にすげればきつと望みの所へ導いてくださるでしょうから、お詣りをなさるがいいと思います。ここから近い八幡やわたの宮は九州の松浦、箱崎はこぎと同じ神様なのですから、あちらをお立ちになる時、お立てになった願もありますから、神の庇護で無事に帰京しましたというお礼参りをなさいませ」

と豊後介は言つて、姫君に八幡詣りやわたまいをさせた。八幡のことにくわしい人に聞いておいて、御師おしという者の中に、昔親の少弐が知っていた僧の残っているのを呼び寄せて、案内をさせたのである。

「このつぎには、仏様の中で長谷はせの観音様は靈験のいちじるしいものがあると支那しなにまで聞こえているそうですから、お参りになれば、遠国にいて長く苦勞をなすつた姫君をきつとお憐あわれみになってよいことがあるでしょう」

また豊後介は姫君に長谷詣はせもでを勧めて実行させた。船や車を用いずに徒歩で行くこと

にさせたのである。かつて経験しない長い路みちを歩くことは姫君に苦しかったが、人が勧めるとおりにして、つらさを忍んで夢中で歩いて行つた。自分は前生にどんな重い罪障があつてこの苦しみに堪えねばならないのであろう、母君はもう死んでおいでになるにしても、自分を愛してくださるならその国へ自分をつれて行つてほしい。しかしまだ生きておいでになるのならお顔の見られるようにしていただきたいと姫君は観音を念じていた。姫君は母の顔を覚えていなかった。ただ漠然ぼくぜんと親というものの面影を今日きょうまで心に作つて来ているだけであつたが、こうした苦難に身を置いては、いつそう親というものゝの恋しさが切実に感ぜられるのであつた。ようやく椿市つばいちという所へ、京を出て四日めの昼前に、生きている気もしないで着いた。姫君は歩行らしい歩行もできずに、しかもいろいろな方法で足を運ばせて来たが、もう足の裏が腫はれて動かせない状態になつて椿市で休息をしたのである。頼みにされている豊後介と、弓矢を持った郎党が二人、そのほかは僕しもべと子供侍が三、四人、姫君の付き添いの女房は全部で三人、これは髪の上から上着を着た壺装束つぼしょうぞくをしていた。それから下女が二人、これが一行で、派手はでな長谷詣りの一行ではなかつた。寺へ燈明料を納めたりすることをここで頼あるじんだりしているうちに日暮れ時になった。この家の主人である僧が向こうで言っている。

「私には今夜泊めようと思ってお客があつたのだのに、だれを勝手に泊めてしまったのだ、物知らずの女どもめ、相談なしに何をしたのだ」

怒おこっているのである。九州の一行は残念な気持ちでこれを聞いていたが、僧の言つたとおりに参詣者の一団が町へはいって来た。これも徒歩で来たものらしい。主人らしいのは二人の女で召使の男女の数は多かつた。馬も四、五匹引かせている。目だたぬようにしているが、きれいな顔をした侍などもついていた。主人の僧は先客があつてもその上にどうかしてこの連中を泊めようとして、道に出て頭を搔かきながら、ひよこひよここと追従ついしょうをしていた。かわいそうな氣はしたが、また宿を変えるのも見苦しいことであるし、面倒めんどうでもあつたから、ある人々は奥のほうへはいり、残りの人々はまた見えない部屋へのほうへやったりなどして、姫君と女房たちとだけはもとの部屋の片すみのほうへ寄つて、幕のようなもので座敷の仕切りをして済ませていた。あとの客も無作法な人たちではなかつた。遠慮深く静かで、双方ともつつましい相い客になつていた。このあとから来た女というのは、姫君を片時も忘れずに恋しがっている右近であつた。年月がたつにしたがつて、いつまでも続けている女房勤めも氣がさすように思われて、煩悶はんもんのある心の慰めに、この寺へたびたび詣まつていのである。長い間の経験で徒歩の旅を大儀

とも何とも思っているのではなかったが、さすがに足はくたびれて横になっていた。こちらの豊後介は幕の所へ来て、食事なのであろう、自身で折敷おしきを持って言っていた。

「これを姫君に差し上げてください。膳ぜんや食器なども寄せ集めのものです、まったく失礼なのです」

右近はこれを聞いていて、隣にいる人は自分らの階級の人ではないらしいと思った。幕の所へ寄つてのぞいて見たが、その男の顔に見覚えのある気がした。だれであるかはまだわからない。豊後介のごく若い時を知っている右近は、肥えて、そうして色も黒くなっている人を今見て、直ぐには思い出せないのである。

「三条、お召しですよ」

と呼ばれて出て来る女を見ると、それも昔見た人であった。昔の夕顔夫人に、下の女房ではあったが、長く使われていて、あの五条の隠れ家にまでも来ていた女であることがわかった右近は、夢のような気がした。主人である人の顔を見たく思つても、それはのぞいて見られるようなふうにはしていなかった。思案の末に右近は三条に聞いてみよう、兵藤太ひょうとうだと昔言われた人もこの男であろう、姫君がここにおいでになるのであろうかと思うと、気が急いで、そしてまた不安でないのであった。幕の所から三条を呼ば

せたが、熱心に食事をしている女はすぐに出て来ないのを右近は憎くさえ思ったが、それは勝手すぎた話である。やっと出て来た。

「どうもわかりません。九州に二十年も行っておりました卑しい私どもを知っておいになるとおっしゃる京のお方様、お人違いではありませんか」

と言う。田舎風いなかに真赤まっかな搔練かひねりを下に着て、これも身体からだは太くなっていた。それを見ても自身の年が思われて、右近は恥ずかしかった。

「もっと近くへ寄って私を見てごらん。私の顔に見覚えがありますか」

と言って、右近は顔をそのほうへ向けた。三条は手を打って言った。

「まああなたでいらつしやいましたね。うれしいって、うれしいって、こんなこと。まああなたはどちらからお参りになりました。奥様はいらつしやいますか」

三条は大声をあげて泣き出した。昔は若い三条であつたことを思い出すと、このなりふりにかまわぬ女になっていることが右近の心を物哀れにした。

「おとどさんはいらつしやいますか。姫君はどうおなりになりました。あてきと言った人は」

と、右近はたたみかけて聞いた。夫人のことは失望をさせるのがつらくてまだ口に出

せないのである。

「皆、いらっしやいます。姫君も大人おとなになっておいでになります。何よりおとどおとどさんにこの話を」

と、言つて三条は向こうへ行つた。九州から来た人たちの驚いたことは言うまでもない。

「夢のような気がします。どれほど恨んだかしのれない方にお目にかかることになりました」

おとどおとどはこう言つて幕の所へ来た。もうあちらからも、こちらからも隔てにしてあつた屏風びょうぶなどは取り払つてしまつた。右近もおとどおとども最初はものが言えずに泣き合つた。やつとおとどおとどが口を開いて、

「奥様はどうおなりになりました。長い年月の間夢にでもいらっしやる所を見たいと大願を立てましたがね、私たちは遠い田舎の人になつていたのですからね、何の御様子も知ることができません。悲しんで、悲しんで、長生きすることが恨めしくてならなかつたのですが、奥様が捨ててお行きになつた姫君のおかわい顔おかわいを拝見しては、このまま死しんでは後世ごせの障さわりになると思ひましてね、今でもお護もりしています」

お・と・ど・の話し続ける心持ちを思つては、昔あの時に気おくれがして知らせられなかったよりも、幾倍かのつらさを味わいながらも、絶体絶命のようになって、右近は、

「お話ししてもかいのないことでございますよ。奥様はもう早くお亡れになったのですよ」

と言つた。三条も混ぜて三人はそれから咽せ返つて泣いていた。

日が暮れたと騒ぎ出し、お籠りをする人々の燈明が上げられたと宿の者が言つて、寺へ出かけることを早くと急がせに來た。そのために双方ともまだ飽き足らぬ気持ちで別れねばならなかつた。

「ごいっしょにお詣りをしましょうか」

とも言つたが、双方とも供の者の不思議に思うことを避けて、お・と・ど・のほうではまだ豊後介にも事実を話す間がないままで同時に宿坊を出た。右近は人知れず九州の一行の中の姫君の姿を目に探っていた。そのうちに美しい後ろ姿をした一人の、非常に疲労した様子で、夏の初めの薄絹の単衣ひとえのような物を上から着て、隠された髪の毛の透き影のみごとそうな人を右近は見つけた。お氣の毒であるとも、悲しいことであるとも思つてながめたのである。少し歩き馴れた人は皆らくらくと上の御堂みどうへ着いたが、九州の一行は姫



君を介抱かいほうしながら坂を上るので、初夜の勤めの始まるころにようやく御堂へ着いた。御堂の中は非常に混雑していた。右近が取らせてあったお籠り部屋こもべやは右側の仏前に近い所であつた。九州の人の頼んでおいた僧は無勢力なのか西のほうの間で、仏前に遠かつた。

「やはりこちらへおいでなさいませ」

と言つて、右近が召使をよこしたので、男たちだけをそのほうに残して、おとどは右近との邂逅かいこうを簡単に豊後介へ語つてから、右近の部屋のほうへ姫君を移した。

「私などつまらない女ですが、ただ今の太政大臣様にお仕えしておりますのでね、こんな所に出かけていまして不都合はだれもしないであろうと安心していられるのですよ。地方の人らしく見ますと、生意氣にお寺の人などは輕蔑けいべつした扱いをしますから、姫君にもつたいなくて」

右近はくわしい話もしたのであるが、仏前の経声の大きいのに妨げられて、やむをえず仏を拜んでだけいた。

この方をお捜しくださいませ、お逢あわせくださいませとお願いしておりましたことをおこなえくございましたから、今度は源氏おとどの大臣がこの方の子にしてお世話をなさりた

いと熱心に思召おぼしめすことが実現されますようにお計らいくださいませ、そうしてこの方が幸福におなりになりますように。

と祈っているのであった。国々の参詣者さんけいが多かった。大和守の妻も来た。その派手な参詣ぶりをうらやんで、三条は仏に祈っていた。

「大慈大悲の観音様、ほかの願いはいっさいいたしません。姫君を大貳だいにの奥様でなければ、この大和の長官の夫人にしていただきたいと思えます。それが事実になります。私も、私どもにも幸福が分けていただけました時に厚くお礼をいたします」

額に手を当てて念じているのである。右近はつまらぬことを言うのにがにがしく思った。

「あなたはとんでもないほど田舎者になりましたね。中将様は昔だつてどうだったでしょう、まして今では天下の政治をお預かりになる大臣おとどですよ。そうしたお盛んなお家の方で姫君だけを地方官の奥さんという二段も三段も低いものにしてそれでいいのですか」

と言うと、

「まあお待ちなさいよあなた。大臣様だつて何だつてだめですよ。大貳のお館やかたの奥様が

清水きよみずの観世音寺へお参りになった時の御様子をご存じですか、帝様みかどの行幸みゆきがあれ以上のものとは思えません。あなたは思い切ったひどいことをお言いになりますね」

こう言って、三条はなお祈りの合掌を解こうとはしなかった。九州の人たちは三日参籠さんろうすることになっていた。右近はそれほど長くいようとは思っていなかったが、この機会おきに昔の話も人々としたく思っ、寺のほうへ三日間参籠すると言わせるために僧を呼んだ。雑用をする僧は願文がんもんのことなどもよく心得ていて、すばやくいろいろのことを済ませていく。

「いつもの藤原瑠璃君ふじわらのるぎみという方のためにお経をあげてよくお祈りすると書いてくださいます。その方にね、近ごろお目にかかることができましたからね。その願果たしもさせていただきます」

と右近の命じていることも九州の人々を感動させた。

「それは結構なことでしたね。よくこちらでお祈りしているせいでしょう」

などとその僧は言っていた。御堂の騒ぎは夜通し続いていた。

夜が明けたので右近は知った僧の坊へ姫君を伴って行った。静かに話したいと思うからであろう。質素なふうで来ているのを恥ずかしがっている姫君を右近は美しいと思っ

た。

「私は思いがけない大きなお邸<sup>やしろ</sup>へお勤めすることになりました、たくさんな女の方を見ましたが、殿様の奥様の御容貌<sup>ごきりよう</sup>に比べてよいほどの方はないと長い間思っていました。それにお小さいお姫様がまた美しいことはもったもなことです、そのお姫様はまたどんなに大事がられていらつしやるか、まったく幸福そのもののような方ですがね、こうして御質素なふうをなすつていらつしやる姫君を、私は拝見して、その奥様や二条院のお姫様に姫君が劣つていらつしやるように思われませんのでうれしゅうございます。殿様はおつしやいますのですよ、自分の父君<sup>みかど</sup>の帝様の時から宮中の女御<sup>によう</sup>やお后<sup>きさき</sup>、それから以下の女性は無数に見ているが、ただ今の帝様のお母様のお后の御美貌と自分の娘の顔とが最もすぐれたもので、美人とはこれと言うのであると思われるつて。私は拝見していて、そのお后様は存じませんけれど、お姫様はまだお小さくて将来は必ずすぐれた美人におなりになるでしょうが、奥様の御美貌に並ぶ人はないと思うのですよ。殿様も奥様のお美しさの価値を十分ご存じでいらつしやるでしょうが、御自分のお口から最上の美人の数へお入れにはなりにくいのですよ。こんなこともお言いになることがあるのですよ、あなたは私と夫婦になれたりしてもったいなく思いませんかなどと戯談<sup>じやうだん</sup>をね。

お二人のそろいもそろったお美しさを拝見しているだけで命も延びる気がするのですよ。あんな方はあるものでもありません、私がそんなに思う六条院の奥様にど一つ姫君は劣っていらつしやいけません。物は限りがあつてすぐれた美貌と申しても円光を後ろに負っていらつしやるわけではありませんけれど、これがほんとうに美しいお顔と申し上げていいのでございましょう」

右近は微笑<sup>ほほえ</sup>んで姫君をながめていた。少弐<sup>しょうに</sup>の未亡人もうれしそうである。

「こんなすぐれたお生まれつきの方を、もう一步で暗い世界へお沈めしてしまうところでしたよ。惜しくてもつたいなくて、家も財産も捨てて頼<sup>たよ</sup>りにしてよい息子<sup>むすこ</sup>にも娘にも別れて、今ではかえつて知らぬ他国のような心細い氣のする京へ歸つて来たのですよ。あなた、どうぞいい智慧<sup>ちえ</sup>を出してくださいって、姫君の御運を開いてあげてくださいまし。貴族のお家に仕えておいでになる方は、便宜がたくさんあるでしょう。お父様の大臣が姫君をお認めくださいますように計らってくださいまし」

とおとどは言うのであった。姫君は恥ずかしく思つて後ろを向いていた。

「それがね、私はつまらない者ですけれど、殿様がおそばで使つていてくださいますからね、昔のいろいろな話を申し上げる中で、どうなさいましたろうと私が姫君のことを

よく申すものですから、殿様が、ぜひ自分の所へ引き取りたく思う。居所を聞き込んだら知らせるがよいとおっしゃるのですよ」

「源氏の大臣様はどんなにおりっぱな方でも、今のお話のようなよい奥様や、そのほかの奥様も幾人いくたりかいいらっしゃるのでしょうか。それよりもほんとうのお父様の大臣へお知らせする方法を考えてください」

とおとどが言うのを聞いて、右近ははじめて夕顔夫人を愛して、死の床に泣いた人の源氏であつたことを話した。

「どうしてもお亡かくれになつた奥様を忘れられなく思召おぼしめしてね。奥様の形見だと思つて姫君のお世話をしたい、自分は子供も少なくて物足りないのだから、その人が捜し出せたなら、自分の子を家へ迎えたように世間へは知らせておこうと、それはずっと以前からそうおっしゃるのですよ。私の幼稚な心弱さから、奥様のお亡なくなりになりましたことをあなたがたにお知らせすることができなくておりますうちに、御主人が少式におなりになつたでしょう。それはお名を聞いて知つたのですよ。お暇乞いしまごいに殿様の所へおいでになりましたのを、私はちらとお見かけしましたが、何をお尋ねすることもできないじまいになつたのですよ。それでもまだ姫君をあの子の夕顔の花の咲いた家へお置きに

なつて赴任をなさるのだと思つていました。まあどうでしょう、もう一步で九州の人になつておしまいになるところでございましたね」

などと人々は終日昔の話をしたり、いっしょに念誦ねんずを行なつたりしていた。御堂へ参詣する人々を下に見おろすことのできる僧坊であつた。前を流れて行くのが初瀬川である。右近は、

「二もとの杉すぎのたちどを尋ねずば布留川ふるのべに君を見ましや

ここでうれしい逢瀬おうせが得られたと申すものでございます」  
と姫君に言つた。

初瀬川はやくのことは知らねども今日けふの逢瀬に身さへ流れぬ

と言つて泣いている姫君はきわめて感じのよい女性であつた。これだけの美貌びぼうが備わつていても、田舎風いなかのやばな様子が添つていたなら、どんなにそれを玉の瑕きずだと惜し

まれることであろう、よくもこれほどりっぱな貴女にお育ちになったものであると、右近は少弐未亡人に感謝したい心になった。母の夕顔夫人はただ若々しくおおような柔らかな感じの豊かな女性というにすぎなかった。これは容姿に気高けだかさのあるすぐれた姫君と見えるのであった。右近はこれによつて九州という所がよい所であるように思われたが、また昔の朋輩ほうばいが皆不恰好ぶかつこうな女になっていたものであったから不思議でならなかった。日が暮れると御堂に行き、翌日はまた坊に帰つて念誦ねんずに時を過ごした。秋風が溪たにの底から吹き上がつて来て肌寒はださむさの覚えられる所であつたから、物寂しい人たちの心はまして悲しかった。姫君は右近の話から、人並みの運も持たないように悲観をしていた自分も、父の家の繁栄と、低い身分の人を母として生まれた子供たちさえも皆愛されて幸福になつてゐることがわかつた上は、もう救われる時に達したのであるかもしれないという氣になった。帰る時は双方でよく宿所を尋ね合つて、またわからなくなつてはと互いに十分の警戒をしながら別れた。右近の自宅も六条院に近い所であつたから、九州の人の宿とも遠くないことを知つて、その人たちは力づけられた氣がした。

右近は旅からすぐに六条院へ出仕した。姫君の話をする機会を早く得たいと思う心から急いだのである。門をはいるとすでにすべての空氣に特別な豪華な家であることが感



ぜられるのが六条院である。来る車、出て行く車が無数に目につく。自分などがこの家の一人の女房として自由に出入りをすることもまばゆい氣のすることであると右近に思われた。その晩は主人夫婦の前へは出ずに、部屋へ引きこもって右近はまた物思いをした。翌日は昨日自宅から上がって来た高級の女房が幾人いくたりもある中から、特に右近が夫人に呼び出されたのを、右近は誇らしく思った。源氏も夫人の居間にいた。

「どうして長く家へ行っていたのかね。少しこれまでもは違っているのではないか。独身者はこんな所にいる時と違って、自宅では若返ることもできるのだらう。おもしろいことがきつとあつたらう」

などと例の困らせる氣の戲談じょうだんを源氏が言う。

「ちようど七日お暇やすみをいただいていたのでございますが、おもしろいことなどはなかなかないのでございます。山へ参りましてね。お氣の毒な方を発見いたしました」

「だれ」

と源氏は尋ねた。突然その話をするのも、これまで夫人にしていな昔の話から筋を引いていることを、源氏にだけ言えば夫人があとで話をお聞きになつて不快がられないかなどと右近は迷つていて、

「またくわしくお話を申し上げます」

と言つて、ほかの女房たちも来たのでそのまま言いさしにした。

灯<sup>ひ</sup>などをともさせてくつろいでいる源氏夫婦は美しかった。女王<sup>にやう</sup>は二十七、八になった。盛りの美があるのである。このわずかな時日のうちにも美が新しく加わったかと右近の目に見えるのであった。姫君を美しいと思つて、夫人に劣つていないと見たもの思ひなしが、やはり一段上の美が夫人にはあるようで幸福な人と不運な人とはこれだけの相違があるものらしいなどと右近は思った。寢室<sup>しむ</sup>にはいつてから、脚<sup>あし</sup>を撫<sup>な</sup>でさせるために源氏は右近を呼んだ。

「若い人はいやな役だと迷惑がるからね。やはり昔<sup>な</sup>馴染<sup>しみ</sup>の者は氣心が双方でわかつていてどんなことでもしてもらえるよ」

と源氏が言っているのを聞いて、若い女房たちは笑っていた。

「そうですよ。どんなことでもさせていただいて私たちは結構なんですけれど、あの御<sup>ご</sup>戯談<sup>ぎだん</sup>に困るだけね」

などと言っているのであった。

「奥さんも昔馴染<sup>な</sup>どうしがあまり仲よくしては機嫌<sup>きげん</sup>を悪くなさらない。決して寛大な方

ではないから危いね」  
あやふな

などと言つて源氏は笑っていた。愛嬌あいせうがあつて常よりもまた美しく思われた。このごろは公職が閑散なほうに變つてしまつて、自宅でものんきに女房などにも戯談を言いかけて相手をためすことなどを楽しむ源氏であつたから、右近のような古女ふるおんなにも戯れてみせるのである。

「発見したつて、どんな人かね。えらい修験者しゅげんじやなどと懇意になつてつれて来たのか」  
と源氏は言つた。

「ひどいことをおっしゃいます。あの薄命な夕顔のゆかりの方を見つけましたのでございます」

「そう、それは哀れな話だね、これまでどこにいたの」

と源氏に尋ねられたが、ありのままには言いにくくて、

「寂しい郊外に住んでおいでになつたのでございます。昔の女房も半分ほどはお付きしてしまつてございますから、以前の話もいたしまして悲しゅうございました」

と右近は言つていた。

「もうわかつたよ。あの事情を知つていらつしやらない方がいられるのだからね」

と源氏が隠すように言うと、

「私がおじやまなの、私は眠くて何のお話だかわからないのに」

と女王は袖そでで耳をふさいだ。

「どんな容貌きりよう、昔の夕顔に劣っていない」

「あんなにはおなりにならないかと存じておりましたけれど、とてもおきれいにおなりになったようでございます」

「それはいいね、だれぐらい、この人とはどう」

「どういたしまして、そんなには」

と右近が言うと、

「得意なようで恥ずかしい。何にせよ私に似ていれば安心だよ」

わざと親らしく源氏は言うのであった。

その話を聞いた時から源氏はおりおり右近一人だけを呼び出して姫君の問題について語り合った。

「私はある人を六条院へ迎えることにするよ。これまでも何かの場合によく私は、あの人の行くえを失ってしまったことを思っ暗い心になっていたのだからね。聞き出せば

すぐにその運びにしなければならぬのを、怠っていることでも済まない気がする。お父さんの大臣に認めてもらう必要などはないよ。おおぜいの子供に大騒ぎをしていられるのだからね。たいした母から生まれたのでもない人がその中へはいって行つては、結局また苦勞をさせることになる。私のほうは子供の数が少ないのだから、思いがけぬ所で発見した娘だとも世間へは言つておいて、貴公子たちが恋の対象にするほどにも私はかすずいてみせる」

源氏の言葉を聞いていて、右近は姫君の運がこうして開かれて行きそうであるとうれしかった。

「何も皆思召し次第でございます。内大臣へお知らせいたしますのも、あなた様のお手でなくてはできないことでございます。不幸なお亡くなり方をなさいました奥様のかわりにもともかくも助けておあげになりましたなら罪がお軽くなります」

と右近が言うと、

「私をまだそんなふうにも責めるのだね」

源氏は微笑みながらも涙ぐんでいた。

「短いばかり縁だったと、私はいつもあの人のことを思っている。この家に集まつて

来ている奥さんたちもね、あの時にあの人を思ったほどの愛を感じた相手でもなかったのが、皆あの人のように短命でないことだけで、私の忘れっぽい男でないのを見届けているのが多いのに、あの人の形見にはただ右近だけを世話していることが残念な気のすることは始終だったのに、そうして姫君を私の手もとへ引き取ることができればうれいだろう」

こう言つて、源氏は姫君へ最初の手紙を書いた。あの末摘花すえつむはなに幻滅を感じたことの忘れられない源氏は、そんなふうに逆境に育った麗人の娘、大臣の実子も必ずしも期待にそむかないとは思われない不安さから手紙の返事の書きようでまずその人を判断しようとしたのである。まじめにこまごまと書いた奥には、

こんなに私があなたのことを心配していますことは、

知らずとも尋ねて知らん三島江おに生みふる三稜みくりのすぢは絶えじな

とも書いた。右近はこの手紙を自身で持つて行つて、源氏の意向を説明した。姫君用の衣服、女房たちの服の材料などがたくさん贈られた。源氏は夫人とも相談したものら

しく、衣服係の所にできていた物も皆取り寄せて、色の調子、重ねの取り合わせの特にすぐれた物を選んで贈ったのであったから、九州の田舎いなかに長くいた人々の目に珍しくまばゆい物と映ったのはもっともなことである。姫君自身は、こんなりっぱな品々でなくとも、実父の手から少しの贈り物でも得られたのならうれしいであろうが、知らない人と交渉を始めようなどとは意外であるというように、それとなく言って、贈り物を受けることを苦しく思うふうであったが、右近は母君と源氏との間に結ばれた深い因縁を姫君に言って聞かせた。人々も横から取りなした。

「そうして源氏の大臣の御厚意でごりっぱにさえおなりになりましたなら、内大臣様のほうからごく自然に認めていただくことができます。親子の縁と申すものは絶えたようでも絶えないものでございます。右近でさえお目にかかりたいと一心に祈っていました結果はどうでございます。神仏の導きがあったではございませんか。御双方ともお身体からださえお丈夫でいらっしゃればきつとお逢あいになれる時がまいります」

とも慰めるのである。まず早く返事と言って皆がかりで姫君を責めて書かせるのであった。自分はもうすっかり田舎者なのだからと姫君は書くのを恥ずかしく思うふうであった。用箋ようせんは薫物たきものの香を沁しませた唐紙とうしである。

数ならぬみくりや何のすぢなればうきにしもかく根をとどめけん

とほのかに書いた。字ははかない、力のないようにも見えるものであったが、品がよくて感じの悪くないのを見て源氏は安心した。姫君を住ます所をどこにしようかと源氏は考えたが、南の一廓はあいた御殿もない。華奢かしやな生活のここが中心になっている所であるから、人出入りもあまりに多くて若い女性には気の毒である。中宮のお住居すまいになっている一廓の中には、そうした人にふさわしい静かな御殿もあいているが、中宮の女房になったように世間へ聞かれてもよろしくないと源氏は思つて、少しじみな所ではあるが東北の花散里はなぢるさとの住居の中の西の対は図書室になっているのを、書物をほかへ移してそこへ住ませようという考えになった。近くにいる人も気だての優しい、おとなしい人であるから、花散里と親しくして暮らすのもいいであろうと思つたのである。こうなつてから夫人にも昔の夕顔の話を源氏はしたのであつた。そうした秘密があつたことを知つて夫人は恨んだ。

「困るね。生きている人のことでは私のほうから進んで聞いておいてもらわねばならないこともありますかね。たとえばこんな時にでも昔のそうした思い出を話すのはあなたが



特別な人だからですよ」

こう言っている源氏には故人を思う情に堪えられない様子が見えた。

「自分の経験ばかりではありませんがね、他人のことでもよく見ましたがね、女というものはそれほど愛し合っている仲でなくてもずいぶん嫉妬しつとをするもので、それに煩わされている人が多いから、自分は恐ろしくて、好きな生活はすまいと念がけながらも、そのうち自然に放縦ほうじょうにもなって、幾人もの恋人を持ちましたが、その中で可憐かれんで可憐でならなく思われた女としてその人が思い出される。生きていたなら私は北の町にいる人と同じくらいには必ず愛しているでしょう。だれも同じ型の人はないものですが、その人は才女らしい、りっぱなというような点は欠けていたが、上品でかわいかった」

などと源氏が言うのと、

「でも、明石あかしの波にくらべるほどにはどうか」

と夫人は言った。今も北の御殿の人を、不当にすばらしく愛されている女であると夫人はねたんでいた。小さい姫君がかわいいふうをして前に聞いているのを見ると、夫人の言うほうがもつともであるかもしれないと源氏は思った。それらのことは皆九月のうちのことであった。

姫君が六条院へ移つて行くことは簡単にもいかなかった。まずきれいな若い女房と童女を捜し始めた。九州にいたところには相当な家の出でありながら、田舎へ落ちて来たような女を見つけ次第に雇つて、姫君の女房に付けておいたのであるが、脱出のことがにわかに行なわれたためにそれらの人は皆捨てて来て、三人のほかにはだれもいなかった。京は広い所であるから、市女いちめというような者に頼んでおくと、上手じょうずに捜してつれて来るのである。だれの姫君であるかというようなことはだれにも知らせてないのである。いったん右近の五条の家に姫君を移して、そこで女房を選りえととのえもし衣服の仕度したも皆して、十月に六条院へはいった。源氏は新しい姫君のことを花散里に語った。

「私の愛していた人が、むやみに悲観して郊外のどこかへ隠れてしまっていたのです。子供もあつたので、長い間私は捜させていたのですがなんら得る所がなくて、一人前の女になるまでほかに置いたわけなのですがその子のことが耳にはいった時にすぐにも迎えておかなければと思つて、こちらへ来させることにしたのです。もう母親は死んでいるのです。中将をあなたの子供にしてもらっているのですから、もう一人あつた方がいいでしょう。世話をしてやってください。簡単な生活をして来たのですから、田舎風なことが多いでしょう。何かにつけて教えてやってください」

「ほんとうにそんな方がおありになったのですか。私は少しも知りませんでした。お嬢さんがお一人で、少し寂しすぎましたから、いいことですね」

花散里はおおように言っている。

「母親だった人はとても善良な女でしたよ。あなたも優しい人だから安心してお預けすることができなのです」

などと源氏が言った。

「母親らしく世話を焼かせていただくこともこれまでではあまり少なくて退屈でしたから、いいことだと思います、ごいっしょに住むのは」

と花散里は言っていた。女房たちなどは源氏の姫君であることを知らずに、

「またどんな方をお迎えになるのでしょうか。同じ所へね。あまりに奥様を古物扱いにあそばすではありませんか」

と言っていた。

姫君は三台ほどの車に分乗させた女房たちといっしょに六条院へ移って来た。女房の服装なども右近が付いていたから田舎いなかびずに調えられた。源氏の所からそうした人たちに入り用な綾あやそのほかの絹布類は呈供してあったのである。

その晩すぐに源氏は姫君の所へ来た。九州へ行っていた人たちは昔光源氏という名は聞いたこともあったが、田舎住まいをしたうちにそのまれな美貌びぼうの人がこの世に現存していることも忘れていて今ほのかな灯ひの明りに几帳きちょうの綻ほころびから少し見える源氏の顔を見ておそろしくさえなつたのであった。源氏の通つて来る所の戸口を右近があげると、

「この戸口をはいる特権を私は得ているのだね」

と笑いながらはいつて、縁側の前の座敷へすわつて、

「灯があまりに暗い。恋人の来る夜のようにではないか。親の顔は見たいものだと聞いているがこの明りではどうだろう。あなたはそう思いませんか」

と言つて、源氏は几帳を少し横のほうへ押しやった。姫君が恥からずかしがつて身体を細くしてすわっている様子に感じよさがあつて、源氏はうれしかった。

「もう少し明るくしてはどう。あまり気どりすぎているように思われる」

と源氏が言うので、右近は燈心を少し搔かき上げて近くへ寄せた。

「きまりを悪がりすぎますね」

と源氏は少し笑つた。ほんとうにと思つているような姫君の目つきであつた。少しも他人のように扱あつかわないで、源氏は親らしく言う。

「長い間あなたの居所がわからないので心配ばかりさせられましたよ。こうして逢うことができて、まだ夢のような気がしてね。それに昔のことが思い出されて堪えられないものが私の心にあるのです。だから話もよくできません」

こう言つて目をぬぐう源氏であつた。それは偽りでなくて、源氏は夕顔との死別の場を悲しく思い出しているのであつた。年を数えてみて、

「親子であつてこんなに長く逢えなかつたというようなことは例もないでしょう。恨めしい運命でしたね。もうあなたは少女のように恥ずかしがつてばかりいてよい年でもないのですから、今日までの話も私はしたいのに、なぜあなたは黙つてばかりいますか」と源氏が恨みを言うのを聞くと、何と言つてよいかわからぬほど姫君は恥ずかしいのであつたが、

「足立たずで（かぞいろはいかに哀れと思ふらん三とせになりぬ足立たずして）遠い国へ流れ着きましたところから、私は生きておりましたことか、死んでおりましたことかわからないのでございます」

とほのかに言うのが夕顔の声そのままの語音ごいんであつた。源氏は微笑を見せながら、  
「あなたに人生の苦しい道をばかり通らせて来たむく酬いは私がしないでだれにしてもらえ

ますか」

と言つて、源氏は聡明らしい姫君の物の言いぶりに満足しながら、右近にいろいろな注意を与えて源氏は歸つた。

感じのよい女性であつたことをうれしく思つて、源氏は夫人にもそのことを言つた。

「野蠻な地方に長くいたのだから、氣の毒なものに仕上げられているだろうと私は輕蔑してしたが、こちらがかえつて恥ずかしくなるほどでしたよ。娘にこうした麗人を持つてゐるということを世間へ知らせるようにして、よくおいでになる兵部卿の宮などに懊惱をおさせするのだね。恋愛至上主義者も私の家ではきまじめな方面しか見せないのも妙齡の娘などがいないからなのだ。たいそうにかしずいてみせよう、まだ成つていない貴公子たちの懸想ぶりをたんと拝見しよう」

と源氏が言ふと、

「変な親心ね。求婚者の競争をあおるなどとはひどい方」

と女王は言ふ。

「そうだった、あなたを今のような私の心だったらそう取り扱うのだった。無分別に妻などにはしないで、娘にしておくのだった」

夫人の顔を赤らめたのがいかにも若々しく見えた。源氏は硯すずりを手もとへ引き寄せながら、無駄むだ書きのように書いていた。

恋ひわたる身はそれながら玉鬢たまかつらいかなる筋を尋ね来つらん

「かわいそうに」

とも独言ひとりごとしているのを見て、玉鬢の母であった人は、前に源氏の言ったとおり、深く愛していた人らしいと女王は思った。

源氏は子息の中将にも、こうこうした娘を呼び寄せたから、気をつけて交際するがよいと言ったので、中将はすぐに玉鬢の御殿へ訪ねたずて行った。

「つまらない人間ですが、こんな弟がおりますことを御念頭にお置きくださいまして、御用があればまず私をお呼びになってください。こちらへお移りになりました時も、存じないものでお世話をいたしませんでした」

と忠実なふうに言うのを聞いていて、真実のことを知っている者はきまり悪い気がするほどであった。物質的にも一所懸命の奉仕をしていた九州時代の姫君の住居も現在の

六条院の華麗な設備に思い比べてみると、それは田舎らしいたまらないものであったようにおとどなどは思われた。すべてが洗練された趣味で飾られた気高い家けだかにいて、親兄弟である親しい人たちは風采ふうさいを始めとして、目もくらむほどりっぱな人たちなので、こうなつてはじめて三条も大式を輕蔑けいべつしてよい氣になった。まして大夫たゆうの監げんは思い出すだけでさえ身ぶるいがされた。何事も豊後介ぶんごのすけの至誠の賜物たまものであることを玉鬘も認めていたし、右近もそう言つて豊後介を賞めた。確しかとした規律のある生活をするのにはそれが必要であると言つて、玉鬘付きの家従や執事が決められた時に豊後介もその一人に登用された。すっかり田舎上がりの失職者になつていた豊後介はにわかに朗らかな身の上になつた。かりにも出入りする便宜などを持たなかつた六条院に朝夕出仕して、多数の侍を従えて執務することのできるようになったことを豊後介は思いがけぬ大幸福を得たと思つていた。これらもすべて源氏が思いやり深さから起こつたことと言わねばならぬ。

年末になつて、新年の室内裝飾、春の衣裳いしやうを配る時にも、源氏は玉鬘を尊貴な夫人らと同じに取り扱つた。どんなに思ひのほかによい趣味を知つた人と見えても、またどんなまちがった物の取り合わせをするかもしれぬという不安な気持ちもあつて、玉鬘のほ



うへはすでに衣裳にでき上がった物を贈ることにしたが、その時にほうぼうの織物師が力いっぱい念を入れて作り出した厚織物の細長や小桂こうちぎの仕立てたのを源氏は手もとへ取り寄せて見た。

「非常にたくさんありますね。奥さんたちなどにもそれぞれよい物を選えって贈ることにしよう」

と源氏が夫人に言ったので、女王は裁縫係の所にでき上がっている物も、手もとで作らせた物もまた皆出して源氏に見せた。紫の女王はこうした服飾類を製作させることに趣味と能力を持っている点でも源氏はこの夫人を尊重しているのである。あちらこちらの打ち物の上げ場から仕上がって来ている糊のりをした打ち絹も源氏は見比べて、濃い紅べに、朱の色などとさまざまに分けて、それを衣櫃いぐつ、衣服箱などに添えて入れさせていた。高級な女房たちがそばにいて、これをそれに、それをこれにというように源氏の命じるままに贈り物を作っているのであった。夫人もいっしょに見えていて、

「皆よくできているのですから、お召しになるかたのお顔によく似合いそうなのを見立てておあげなさいまし。着物と人の顔が離れ離れなのはよくありませんから」

と言うと、源氏は笑って、

「素知らぬ顔であなは着る人の顔を想像しようとするのですね。それにしてもあなたはどれを着ますか」

と言った。

「鏡に見える自分の顔にはどの着物を着ようという自信も出ません」

さすがに恥ずかしそうに言う女王であつた。紅梅色の浮き模様のある紅紫の小桂、薄い臙脂紫の服は夫人の着料として源氏に選ばれた。桜の色の細長に、明るい赤い搔練を添えて、この姫君の春着が選ばれた。薄いお納戸色に海草貝類が模様になった、織り方にたいした技巧の跡は見えながらも、見た目の感じの派手でない物に濃い紅の搔練を添えたのが花散里。真赤な衣服に山吹の花の色の細長は同じ所の西の対の姫君の着料に決められた。見ぬようにしながら、夫人にはひそかにうなずかれるところがあるのである。内大臣がはなやかできれいな人と見えながらも艶な所の混じっていない顔に玉鬢の似ていることを、この黄色の上着の選ばれたことで想像したのであつた。色に出して見せないのであるが、源氏はそのほうを見た時に、夫人の心の平静でないのを知った。

「もう着る人たちの容貌を考えて着物を選ぶことはやめることにしよう、もらった人に腹をたてさせるばかりだ。どんなによくできた着物でも物質には限りがあつて、人の顔

は醜くても深さのあるものだからね」

こんなことも言いながら、源氏は末摘花すえつむはなの着料に柳の色の織物に、上品な唐草からくさの織られてあるのを選んで、それが艶な感じのする物であったから、人知れず微笑ほほえまれるのであった。梅の折り枝の上に蝶ちようと鳥の飛びちがっている支那風しなな気きのする白い桂うちぎに、濃い紅の明るい服を添えて明石夫人あかしのが選ばれたのを見て、紫夫人は侮辱されたのに似たような気が少しした。空蟬うつせみの尼君あおにびには青鈍色の織物のおもしろい上着を見つけ出したのへ、源氏の服に仕立てられてあった薄黄の服を添えて贈るのであった。同じ日に着るうにとどちらへも源氏は言い添えてやった。自身の選定した物がしつくりと似合っているかを源氏は見に行こうと思うのである。

夫人たちからはそれぞれの個性の見える返事が書いてよこされ、使いへ出した纏頭てんどうもさまざまであったが、末摘花は東の院にいて、六条院の中のことでないから纏頭などは気のきいた考えを出さねばならぬのに、この人は形式的にするだけのことはせずにいらぬ性格であったから纏頭も出したが、山吹色の桂つばきの袖口そでぐちのあたりがもう黒ずんだ色に変色したのを、重ねもなく一枚きりなのである。末摘花女王すえつむはなによおうの手紙は香かおの薫りのする檀だん紙しの、少し年数物になって厚く膨ふくれたのへ、

どういたしましょう、いただき物はかえって私の心を暗くいたします。

着て見ればうらみられけりから衣きぬかへしやりてん袖そでを濡ぬらして

と書かれてあつた。字は非常に昔風である。源氏はそれをながめながらおかしくてならぬような笑い顔をしているのを、何があつたのかというふうに夫人は見ていた。源氏は使いへ末摘花の出した纏頭てんとうのまずいを見て、機嫌きげんの悪くなつたのを知り、使いはそつと立つて行つた。そしてその侍は自身たちの仲間とこれを笑い話にした。よけいな出すぎたことをする点で困らせられる人であると源氏は思っていた。

「りっぱな歌人なのだね、この女王は。昔風の歌詠よみはから衣、袂濡たもとるという恨みの表現法から離れられないものだ。私などもその仲間だよ。凝り固まっていて、新しい言葉にも表現法にも影響されないとこころがえらいものだ。御前などの歌会の際に古い人らが友情を言う言葉に必ずまどいという三字が使われるのもいやなことだ。昔の恋愛をする者の詠む歌には相手が悪く見て仇人あだひとという言葉ことばを三句めに置くことにして、それをさえ中心にすれば前後は何とでもつくと思つたものらしい」

などと源氏は夫人に語った。

「いろんな歌の手引き草とか、歌に使う名所の名とかの集めてあるのを始終見ていて、その中にある言葉を抜き出して使う習慣のついている人は、それよりほかの作り方ができないものと見える。常陸ひたちの親王のお書きになった紙屋紙かみやがみの草紙というのを、読めと言つて女王さんにやおうが貸してくれたがね、歌の髓脳ずいのう、歌の病やまい、そんなことがあまりたくさん書いてあつたから、もともとそのほうの才分の少ない私などは、それを見たからといって、歌のよくなる見込みはないから、むずかしくてお返ししましたよ。それに通じている人の歌としては、だれでもが作るような古いところがあるじゃないかね」

滑稽こっけいでならないように源氏に笑われている末摘花の女王はかわいそうである。夫人はまじめに、

「なぜすぐお返しになりましたの、写させておいて姫君にも見せておあげになるほうがよかつたでしょうにね。私の書物の中にも古いその本はありましたけれど、虫が穴をあけて何も読めませんでした。その御本に通じていて歌の下手へたな方よりも、全然知らない私などとはもっとひどく拙つたないわけですよ」

と言つた。

「姫君の教育にそんなものは必要でない。いったい女というものは一つのこと熱中して専門家的になつてゐることが感じのいいものではない。といつて、どの芸にも門外の人であることはよくないでしょうがね。ただ思想的に確かな人にだけしておいて、ほかは平穩で瑕きずのない程度の女に私は教育したい」

こんなことを源氏は言つていて、もう一度末摘花へ返事を書こうとするふうのないのを、夫人は、

「返しやりてん、とお言いになつたのですから、もう一度何とかおっしゃらないでは失礼ですわ」

と言つて、書くことを勧めていた。人情味のある源氏であつたから、すぐに返歌が書かれた、非常に樂々と、

かへさんと言ふにつけても片しきの夜の衣を思ひこそやれ

ごもつともです。

という手紙であつたらしい。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---